



Kobe University Repository : Kernel

タイトル Title	大和型模型船「宝玉丸」にちなみて(On the Hogyokumaru, the Model Ship "Yamatogata")
著者 Author(s)	田草川, 善助
掲載誌・巻号・ページ Citation	海事資料館年報,7:2-5
刊行日 Issue date	1979
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81005877

Create Date: 2018-01-25



大和型模型船「宝玉丸」にちなみて

田 草 川 善 助

横浜国立大学船舶・海洋工学科の会議室に、和船の模型が飾られている。この模型と私との出会いは、大学紛争が終って（当時工学部は弘明寺地区）それが当時の会議室に置かれてからで、それまでは多分製図室の一隅におかれていたらしい。

初めて模型を見た時の印象は数珠玉のような帆摺管が不思議に見えたことで、その後各地で船の模型を見るにつけ、素人目にも秀れた模型であることがわかってきた。当時の神戸商船大学の松木助教授からも横浜の模型は一級品ですと教えられた。

その後あるプロダクションからこの模型を映画に撮りたいとの話しがあって、正式な帆装指導のため和船研究家の石井謙治氏（漁研）と東大教養学部の安達裕之氏とが弘明寺に見えとの連絡があり、その頃から折にふれ各地の和船の写真などを送って下さっている工学院大学高等学校 教諭の木俣滋郎氏にも連絡し、共に石井・安達 両氏の帆装並に模型の計測を見学した。

模型には次の様な説明文がついている。

「大和型船実物模型（三十二分ノ一）

今ヨリ七十年前阪神東京間ヲ航行シタル宝玉丸（千五百石積）ニシテ製作ニシケ年ノ日ヲ費シタルモノナリ

寄贈者 大阪佐野安船渠

第三回卒業佐野川谷保治氏

製作者 大阪七十二才翁 天野三吉氏

裏に 佐野安船渠社長 佐野川谷安太郎氏

昭和十四年五月五日寄贈

この説明文の縮尺 $\frac{1}{32}$ がまず不審に思えたのは、通常和船模型の縮尺は $\frac{1}{10}$ が最も多く使われており、或いは帆の反数を基準にしても、この場合この船は33反帆であり $\frac{1}{32}$ にした根拠が不明である。

天野三吉なる人物については間もなく科の図

書室で昭和4年の船名録によって次の様なことが判明した。

「天野造船所 大阪市浪速区木津川町 設立明治38年 所有者天野三吉 註に、総屯数約千屯以上の鋼船を製造し得る設備あり」とあったが同11年の船名録には天野氏の名はのっていない。（この間の船名録は図書室では欠本）

この縮尺の問題と天野氏についてはその後、偶然のことから知ることが出来た。

送られて来た某校友会誌を手にし、ふと小須賀勝太郎氏の「5人の卒業生」なる一文をよみ進むうち、氏が大阪木津川天野造船所に職を得て云々との字句が目に入った。

何んとも嬉しかった、早速同氏にかねてから疑問であった宝玉丸縮尺のことなどを問合せたのはその年も後、数日で終ろうとする頃で、あけて1月の下旬、待望の氏から部厚い封書がとどいた。それによると、「氏が大阪についたのが大正5年6月、当時大阪は東西南北の4区で、天野造船所は大阪市南区木津川町3丁目6番地。天野三吉当時54才位で同所は1級漁船建造の資格をもち、当時地方県庁水産試験所用の船を始めとして下関林兼（は）の漁獲物処理運搬船を専門に建造している。佐野川谷安太郎氏は其の造船所の世話役俗にいう浜棟梁で優秀な人望のある大工で紺の半被、黒のパッチ麻裏草履ばきの頼母しい男でした。彼は泉州佐野の出身で船匠として実に才ある名匠で、若き日より天野三吉と伴々明治大正と働らき通し、10年位毎に廻り来る造船不況を乗り切り今日の佐野安船渠の礎を築いた。小学校もろくに終えない氏が、戦後の造船ブームには船の注文取りや契約にニューヨーク・ロンドン・ハンブルグに迄出向いて日本造船界の名をあげた快男子で昭和36年？他界された折、時の池田総理より花輪を受けた程の名物男でした。

昭和初期の不況は造船界にも其の風当りが強

く、倒産閉鎖相つぎ今日想像もつかぬ程で、天野造船所もその例にもれず昭和6年春頃迄は看板を上げていたが到底たえられず、まもなく工場を閉じ裏長屋で細々と暮らしていた。その後長屋の土間に板を並べ和船の模型作りに精根こめてコツコツと、根よく刻みに刻んで自らを慰め、私や佐野安氏がもちよって夫人に焼芋屋や氷水屋を営ませ、暮しの足しにしていたが2・3年近くかけて製作した千石船は実に見事な出来栄でした。

天野氏製作の1隻目は明治40年の東京博覧会に大阪木津川比石造船所名義で出品、後に博物館に寄贈され、2隻目は大正末期、昭和の初期造船界不況の折に永い時間をかけて出来上った模型が佐野安氏の世話で神戸高等商船に納まったもので、その時天寶年間からの和船の寸法割出しの書も同校に納められた事も聞いて居り、他に神社の額も度々刻んで奉納していたのを見えています。それらは造船所廃業以前の事でした。

昭和11年頃長屋の土間で精根こめて作られたのが第3船、これも佐野川谷氏の計らいで記念品として引取られ、4隻目が昭和13年頃、板図を画き、部品を集め製作に着手したが秋9月に

天野氏他界されると其の遺品を氏の旧友が小道具類と共に買いとり模型を完成させるとのことでしたが、その後は全く不明です。

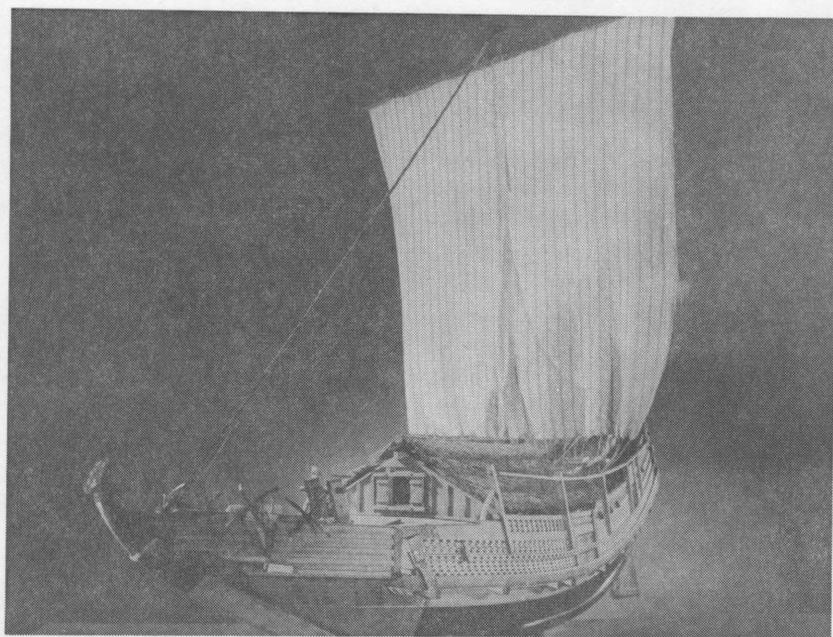
大阪造船界生えぬきの船匠天野三吉氏も後継者が無い為氏を最後にその後を絶った。

又 $\frac{1}{32}$ については明治大正時代の船舶の尺度は総て呷封度でした。依って1呷=12吋、1吋=8分、1呷=96分、其の当時船舶製図の縮尺は大型船は $\frac{1}{8}$ 吋(1分)=1呷即ち $\frac{1}{96}$ で中型船は $\frac{1}{4}$ 吋(2分)=1呷即ち $\frac{1}{48}$ で小型船は $\frac{3}{8}$ 吋(3分)=1呷即ち $\frac{1}{32}$ となります。

千石船は小型に属するので天野氏は $\frac{3}{8}$ 吋=1呷の縮尺で原図を作り、それに依て柱・甲板・手摺り・四ツ爪錨と凡て其の尺度で製作されて居ります等々。」

縮尺の問題は余りにも簡単な事であった。和船故尺貫法と私が頭から決めこんだため呷を使う事は、ついぞ考えなかったこと、それと天野氏の1隻目が明治時代に作られていたことを初めて知った。

又神戸商船大学の松木教授からは「天昭丸(同大学海事資料館所蔵、昭和5年10月大阪天野造船所、天野三吉作)については受入当時の関係者が現存せず少し事情を知っていた先生も



天野三吉氏作「宝玉丸」

横浜国立大学所蔵

大分前に亡くなり詳細は分かりませんが、その方の生前の話では「戦前天野三吉氏から和船の寸法書と共に寄贈を受けた。戦災のため寸法書は焼失したが模型は残った。但し進駐して来た米兵が面白がって遊び道具としたため一部破損し部品も少し失われた、」という程度です。又この模型は昭和9年に展示されたことがありますので、それまでには旧神戸高等商船に来ていたものと思われます。右近家旧蔵（天野三吉昭和7年7月製作）同家より神戸市国際港湾博物館へ寄贈されたもの（寄贈時は完全であったが、その後少し破損している）佐野川谷家から横浜へ寄贈されたものは（学生が学園祭に展示し、一部紛失したと聞いています）の2点は確認しております。神戸高等商船には小関三平校長（大正12～昭和10年）が海事資料を熱心に集めていたとの事で恐らく天昭丸も同校長が受入れたものと思います。小関氏はすでに亡くなりましたが、生前一度お話しを聞いておくべきだったと残念に思っております等、」私の天昭丸に関する質問について、以上のお答えをいただいた。

尚この少し前、大学へ見えた佐野川谷保治氏に宝玉丸の件につき、たずねたところ、折り返し佐野川谷保昌氏より、「宝玉丸につき種々調査しましたが特に目新しい資料もなく、ただ古い写真（貴校への寄贈直前のものと思われる）が出てきましたので複写ですが同封致します」と一葉の写真が同封されて来た。

その後小須賀氏より次の如く知らせてきた。「現在天野姓をつぐ人に大阪栗本鉄工所本社の課長で天野平蔵氏が居り、同氏の母が天野家の養女で婿養子は越前羽咋市出身の船大工でもう一人の養女が旧播磨造船の重役神保泰夫氏（敏男氏？）の弟に嫁ぎしも先年物故されました。

香川県香川郡香南町由佐の藤井薫氏の弟将夫氏を天野造船所の後継として養成しましたがもの別れ、後フィリピン・マニラの石原造船所に推選して活躍中に現地召集されてマニラ陥落の前夜に戦死。その遺族が由佐の藤井静子氏で同家に天野三吉氏の写真、船の設計図等があります。

又明治40年の大阪天王寺に開催された博覧会

の出品に木津川比石造船所の比石彦五郎氏が天野氏の芸術品を展覧に出し精巧さをほめられ、その写真が天野家にあつてよく昔話を聞かされた覚えがあります」と。

そこでこの博覧会のことを調べると明治40年に博覧会の開かれた記録はなく、どうやら明治36年大阪で開催された第5回国内勸業博覧会がこれに該当するようなので、これについて調べることとした。

県立図書館相談室の協力で明治前期産業発達史を教えられたが、これは私にはぼう大とも見える資料で、これに勸業博覧会審査報告第8部（1）の第38類運搬機の中に「大阪府比石彦五郎の出品は日本型模型にして同人工場に於て製造したるものなり」との記録をようやく探し出した。（この博覧会は明治36年3月～7月の5ヶ月間大阪市南区天王寺今宮及堺市大浜公園で開催された）

昨年8月某日高松空港に降りたのは予定時間より1時間程おくれていたが羽田では時よりの強い雨だったが（台風11号）こちらは快晴すぐタクシーで高松郊外の藤井氏宅へ約束の時間におくれていたのが藤井氏は案じておられたが挨拶もそこそこに見せていただいたのは天野造船所盛業時の写真とエジプトヤという店先に（美術商？）於ける記念撮影、その他若干の図面は古くなったので焼きすてたとのこと。

この店頭写真には2人の老人がうつっていたが記念撮影のためか店のウィンドーに次の様な張紙がしてあった。

「二千五百石船長サ四尺五寸
船中室内設備完全細密巧妙ヲ極ム
工作者七十三才老翁 天野三吉
工作期間中生活費補助者八十九才老翁

久米川栄吉

昭和九年一月十五日起工

昭和十一年七月七日竣工記念採影」

天野氏の刻んだ額があるという神社に行くため静子氏に案内されて、途中義兄の薫氏と一緒にになり共に氏の車で県社冠纓神社へ額は神社の拝殿正面、高い所に掲げられてあった。船名額と同様な作りで、表面には縦に「八幡宮」と刻まれて居り、裏面に「歳は八月吉祥日、大阪天

野三吉謹作，讃岐秋山熊造世話人」と記されてあった。神官の友安盛員氏の話では八幡宮にちなんで全部で8枚作り夫々寄進されているのではないかとの話であった。

藤井氏宅に戻り，話しは自然に小須賀氏の事に及び天野造船所に在職すること僅か2年程の小須賀氏が後々まで天野の恩義を感じ，旧主人夫婦への配慮が現在にまで及んでいること等，静子氏曰く「小須賀さんが天野家に残っていたら天野も今でも存続していたでしょう」と。

その夜は高松に泊り翌朝船で東神戸へ，前回見すごした北前船模型天昭丸を見るため神戸商船大学へ，生憎松木教授は会議中とかで面会出来なかったが係の人の案内で資料館へ正面に飾られた天昭丸だけを見学，そこで神戸市国際港湾博物館のあるポート・タワーもここから近いと聞いて直ぐ同館へ，入口付近ですぐ目に入った右近家から寄贈の北前船日本丸を初めて見た。たいら学芸員の話では右近家にもう一杯模型があったとのこと。

それよりただちに大阪へ，到着と同時に小須賀氏に電話して道順をきき初めて小須賀氏宅へ，今まで何度かの通信と電話でのやりとりの故か初対面乍らその様な感じもなく，八十に近いとは思えない程の話し振りは藤井氏達の信頼ぶりがよくわかる。今でも毎日会社に出てこの陣頭指揮とのこと。主として天野家の家族関係をたずねる。

その夜は大阪泊り，翌日は昨夜聞いた天野家ほだい寺のある下寺町の西照寺へ，寺で墓を探したがわからず庫裡に向う住職の宅見龍雄氏から今朝小須賀氏より連絡がありましたと天野家の墓地へ案内してもらう。

墓石には「天野家累代之墓」裏に「大正十三年十二月天野三吉建之」とあった。住職からは最近先代（兄）の跡をついだので天野家のことは現在の天野家しかわかりませんと天野平蔵氏の電話番号を教えられた。それより昨夜小須賀氏から博覧会出品の千石船模型はその後博物館へ寄贈された筈とのことだったので，それを確かめるため市立美術館へ，秋山学芸員からここにはそういう物はありませんが，と二・三電話をかけられていたが，「それかどうかわかりま

せんが大阪城内に古い模型があります」と教えられて大阪城天守閣へ，中村学芸員から見せられた大和型模型船は隆昌丸，製作者は天野氏ではなかった。それから市立博物館へ，ここにも該当するものはなく結局千石船模型の行方は不明であった。

帰浜してまず天野家に電話，当主平蔵氏は「現在南米に出張中で近々一時帰国します」とのこと。

今回の高松行で入手の写真に幾つか疑問の点がある，まず模型船竣工記念の撮影で天野氏は白布をかけたテーブルを前にし，その上に伝馬が，氏の手には櫓をもつだけで肝心の二千五百石と称する宝船が写っていない。宝船と称して他の模型の様な船名がつけてない。竣工が11年7月で宝玉丸（11年1月）と僅かしかへだたりがない。通常1隻の模型を作るに数年かけているのにこの2隻の竣工期日が接近しすぎている等。

そこで手始めにエジプトヤ店主と思われる久米川氏を探すことにした。松木教授の店名の感じが神戸当りではとのこととまず神戸の久米川姓数氏に電話，ここでわかったことは神戸の久米川姓の殆んどが香川を経て徳島の出ということ，次いで高松へここでは久米川医院の久米川久夫氏から氏の一族（徳島県美馬町）についての詳細な調査をされた末該当者なしのおしらせをいただいた。

昨年11月天野氏が帰国されていたので大阪へ，豊中市新千里南町の天野家にはすでに見えていた小須賀氏と今回初めての平蔵氏（栗本鉄工所機械工事部長）から天野家について種々うかがったが，模型については何もわからなかった。

平蔵氏ご母堂ヤエ氏ならずべてわかる筈とのことだったがそのご母堂も昭和43年にすでに亡くなられた。

千石船模型船「宝玉丸」については多くの方からのご協力をいただいた。特に小須賀勝太郎氏には私の知り得た殆んどが氏からおしらせいただいたものだが，これ以上のこと，と2隻の模型については目下探しあぐねている。（昭和54年5月）